

第六節 まじない、禁忌

「まじない」「禁忌」には迷信と思われるものが多いが、日本古来からの言霊信仰によるものだろうか、迷信と分かっているものでもなお信じられ、縁起を担ぎ恐れられていた。これには呪文や用具を使ったりし、自分の不幸を除き、また、逆に相手を不幸にしたりしたといわれる。しかし、まじないや禁忌は文化の進展につれて生活と一致しなくなったため、伝承力を失って漸次消えていく。

一 まじない

1 イグトウ(呪文)

悪魔、邪気を祓ったり、相手を呪う言葉のこと。

2 ウニヌ フィュー ケーティ ハンマ

ウニヌ フィニュー ケーティ ハンマ(海の大魚

を口にくわえてハンマ) うっかり墓地を指した場合、不浄を祓うために唱える呪文。「ハンマ」は意味不明。

3 ウフク(御仏供)

ア、神前にお供えした芋やご飯、その他の食物。イ、これを下げて食べて海に行くと水難に遭わないといわれている。

4 イグトウ(口入れ)

相手を呪う唱え言葉であるが、呪文は不明。このときに物を用いる場合もある。「アママグチ」「イキロー・イチロー(生霊)」「クチ」・「ハナヤマグチ」・「フジチグチ」などがあつたとのことである。

5 グブグブ チョーチン ナンナ フディルク ナ

ンナ ヒャーサ ナティ タボーリ(瘤よ瘤よ、提灯になるな、禿げになるな、平たくなつてください) 頭や額をぶつつけたとき、そこをなでながら唱える。

6 クスクレ シバイクレ(くそをくらす、小便をくら

え)。くしゃみをするときに言う言葉 休息万命の意

7 ハジキ(針突き)

入れ墨のこと。女たちにとって入れ墨は恋人や夫よりも大切なもの、お金、指輪、着物はこの世限りのものであり、綾ハジキはあの世への通行手形で、死んでから祖先のおられる後生へ入れてもらえるとという永遠の信仰があつた。入れ墨をした女の死後は三十三年忌はしなくてもよいといわれ、入れ墨をしていない女は昇天できず宙に迷うといわれていた。

入れ墨は女の装飾でもあり、こうしたまじないでもある。女の子が年ごろになると入れ墨をしたものである。明治九年にこの風習は禁止された。入れ墨を歌った民謡に

○アマラ アマラ 母よ、母よ

アチャラ アチャラ 父よ、父よ

フミ イチグオー クリリ 米一合ください

ハンデチゼーク タヌディ 入れ墨大工を頼んで

ハンヂチ チカサ 入れ墨突かしたいから

○ヲウトウ フシヤム チュトウチ 夫欲しさも一時

トウジ フシヤム チュトウチ 妻欲しさも一時
アヤハンジチ フシヤヤ 綾入れ墨欲しさは
イヌチ カギリ 命の限り
などの唄がある。

8 フミハシギ(背守)

霊魂は背縫いの所から抜けると考え、赤ちゃんには、産衣をさらして簡単に作り下着の上に着せる。そのとき米粒と長老の髪を一本入れた袋を背守として縫いつける。また、後襟の下に男の子ならひし形の縫い取りをし、下に房をつけ、女の子は三角の縫い取りをする。大人でも背縫いのほころびを嫌った。

9 ユムドウイヌスー(すずめのしっぽ)

子供の散髪は前頭部と後頭部にすずめの尾のように少し残し、魂が抜けないようにした。気絶した場合これを引っぱって生き返らせたといわれている。

10 ナビヒゲル(綱墨)

赤ちゃんが生まれて、初立のとき、または宮参りの

とき、赤ちゃんの額にナビヒグルをつけ出発したものである。また子供を背負って外に出るときもナビヒグルをつけるか、ニンニクの汁をつけたともいわれている。

11 ナガリフシ(流れ星)

流れ星を見たらチュツチュツと二回つばを吐く。

12 ミックラジヤ、ミークラジッチ(もぐら)

夜、もぐらが鳴いて道を横切ったら、つばをかける。

13 ナナチマーブイ(くも貝)

魔よけとして軒下につるしておく。本来はスイジガイをつるすといわれるが、くも貝が多いので代用している。

14 シチヌ(豚小屋、便所、閑所、雷隠)

豚小屋は悪魔をはらう力があるとされ、妖怪に会ったら、すぐ豚小屋に行き豚を鳴かせると妖怪は退散するといわれている。

15 フル神(便所の神)
便所で倒れたら、後で塩と米でおはらいをする。

16 チョントク チョントク(京竹)
地震の時唱えると災害に遭わない。

17 クワーギヌシャ(桑の木の下) 桑原

雷のとき何回も繰り返して唱えると災害に遭わない。

18 ホーホ、ホーホ

近所に火事のあった場合屋根へ上り、ふんどし 褌、腰巻き類を打ち振りながら何回も唱え、ヒジヤマ(火魔)を追いかける。

二 その他

1 浜降り

家の中にクツカル(琉球みやましようびん)が飛び

4 ファトウヌ トウダン(鳩が飛んだ)

子供が転んだとき、ファトウヌトウダンと大きな声で脅し、子供を泣かせないようにした。

5 食事後、子供が寝転ぶと牛になると脅した。

6 屋敷の魔よけとして、シヨージガチ(門と玄関の間にある垣根)、沖繩ではヒンプンといっている。魔物は直線的に進むので家の中へ入れないための垣根で石垣か、生け垣があった。

また、屋敷の周囲の石垣で、北東の隅は鬼門といわれ円く積んである。

三 縁 起

1 トウイ(鶏)が夜半に鳴くと凶、夕方遅くまでえさをあさると明日は雨。

2 ミヤー(猫)が家を出て、長い月日がたつてから帰つて来ると、その主人が死ぬといわれている。

2 疱瘡の神

疱瘡が流行すると自分たちのシマ(字)に疱瘡神を入らせたいため、字の外れに番小屋を造り、他の字の人を入れないようにし、若者たちは大縄を担ぎブリキ缶を叩き、「疱瘡神はシマには入れないぞ」と叫びながら回り回り、シマの外れまで追っついていった。各家では門にトベラの木を立てた。

3 アタヒク、ガーク(蛙)

親の言うことを聞かないやんちゃ坊をたしなめるとき、ハマタ(鍋ぶた)をかぶせ、ヒヤンタグシ(火かき棒)で叩くと蛙かえるになるぞと脅したといわれている。

- 死んだ猫は埋めるとたたるので、集落外れの木か、海岸のがけにつるしておく。
- 3 犬が夜に立ち泣ち(遠ほえ)すると人が死ぬといわれている。

- 4 ねずみ(ユムヌ・ヌズミ・オイシヤ)をいじめると、着物をかみ破られる。小便をかけると男根が膨れる。家にいなくなると火事。島外に逃げ出すと飢饉の前兆だといわれている。

- 5 もぐら(ミンクラヂツチ・ミックラジヤ)は死霊の使いといわれている。

- 6 ヒブ(蛇)をいじめると蛇が味噌がめに入る。

- 7 ガラシ(鳥)が家の近くで鳴くと不吉なことが起る。

- 8 鶏が夕方鳴くとその家族か、近親に不吉なことが起こる。

- 14 同じ年内に二人目の葬式を出すときは生きた鶏を同伴させた。

四 夢について

- 1 イミガマラシヤン 遠方にいる近親者がしげく夢に現れたりすると不吉なことがあるのではないかと、心配するほど頻繁に夢を見ること。

- 2 イミミニシユン (夢を見せる)。生霊 死霊がその意志を伝えるために夢を見せること。

- 3 赤牛が両方に米俵を積んでくる夢は吉、金持ちになる。

- 4 蛇の夢は吉という。

- 5 鷹の夢は宝を手に入れるという。

- 9 クツカルが夜渡れば豊年、夕方渡れば飢饉、その巢が深ければ台風。

- 10 ヤニウチドー又はサニウチドー、上手々知名から琴平通りに入る三差路のそばにあった小高い所で、そこに大きな石があったといわれている。背、国頭の人たちが塩売りにここを通るとき、松の小枝を折って載せ、道に迷わないようにと祈り、また上手々知名、出花の婦人たちが、松葉かきに行った時も同様のことをしたといわれている。

- 11 豚小屋に新しく豚を入れるときには、布で左ないしたひもをつくり、それに火を点じて、小屋の中の四隅をあぶってから入れた。

- 12 お盆の日に葬式を出すときは、棺にスリバチをかぶせてから出した。

- 13 友引の日葬式を出すときには人形を入れた。

- 6 天井の梁の下に寝ると悪夢にうなされる。

- 7 濁った水の夢は火事の前兆という。

- 8 人が大勢集まって踊る夢は凶という。

- 9 歯の欠けた夢は凶。それを防ぐには櫛の歯を欠けばよいという。

- 10 げたの歯が欠ける夢を見ると人が死ぬという。

- 11 川の夢は死人が出るという。

五 禁忌

- 1 マシ(枘)はうつ伏せて置いたり、水で洗ってはいけない。その中に入るべきものがこぼれて貧乏になるといわれていた。また、他人にくれたり、盗まれたりすると貧乏になるともいわれている。

2 食べ物、はし移しをする。はし移しは死人の骨を拾うときにするのであるから。

3 大みそかに使った食器はすぐ洗わないで、元たんの朝若水で洗わねばならない。

4 ハミ(敷き居)は親の面。敷き居は踏んではいけない。神事するとき洗米を供え、酒を注ぐ神聖な場所であるから。

5 チンカブル(罪をかぶる)。高倉は神聖な場所だから、そのそばで無益な殺生をすると罪をかぶる。

6 妊婦は家から葬式が出るときには台所に降りて、カマドの方を向いて、葬列を見てはいけない。

7 葬式が自分の干支(えと)の日に当たったら参列してはいけない。

8 夜、ハジ(口笛)を吹くな。夜口笛を吹くと妖怪が

寄ってくる。漁をしているとき口笛を吹くと風が起り海が荒れる。

9 出漁の途中、妊婦や髪を解いた女に会ったら「けがれ」といつて家に帰ったものである。

10 釣り具はまたいではいけない。

11 妊婦は火事を見る。見ると生まれる胎児にあざができるといわれている。

12 墓地内に履物を履いて入ってはいけない。

13 ヒジヤマ(火魔)はかめ類に宿るといわれ、逆さにしておくか、水を入れておかねばならない。

むすび

文化の発達に伴い組織をもたない民間信仰は薄れていき、その取材も困難となり、集落ごとに呼称や祭事の違

う点もあり、寄り物信仰に例をとっても、それにかかわる人によってシバナ神ともなり、ニラーの神ともなっている。いろいろな伝説があることに驚かされた。しかし、全集落を回って取材できなかったことを憾みに思っている。近代になり大本教、天理教、キリスト教、創価学会等一つの教義、体系を持った宗教が入ってきているが、それらについては触れず、消滅しつつある民間信仰の一部にとどめざるを得なくなってしまった。

なお、取材に際しご協力くださった方々に謹んで謝意を申し上げます。

※ 参考資料

和泊町 沖永良部島郷土史資料
操 坦勁 沖永良部島沿革誌
柏 常秋 沖永良部島民俗誌
奄美社 沖永良部島史
中俣 均 沖永良部島における民俗行事の分布変遷
蛸島 直 治癒者としてのユタ
窪 徳忠 中国文化と南島
古野清人 原始宗教

クライナー・ヨゼフ 南西諸島における神観念

湧上元雄 沖繩・奄美の民間信仰

山下欣一

日本民俗学会 沖繩の民俗学的研究

増尾国恵 与論島郷土史

永吉 毅 えらぶの古習俗

甲 東哲 沖永良部島民俗語い

※ 取材に際しご協力くださった主な方たち(敬称略)

国頭―福峯鉄磨(明43生、名島アイ(大2生)

喜美留―伊地知季一(明32生、川上前起(明33生)、福

山鉄勇(明39生)、喜原マツ(大2生)、柏敏夫(明44生)

手々知名―町田カミ(明27生)、町田カメ(明32生)、沖

ミツ(明36生)

和泊―仲津留ツル(明42生)、東郷實正(大2生)

内城―池田内義(明32生)、宗ウト(明34生)

根折―栄ヨシ(明41生)

永嶺―福元ミツ(明26生)、河地ツル(明37生)

皆川―皆吉ツル(明2生)

西原―東ハル(明28生)

その他、高齢者教室の皆様